

日本文化を大きく特徴づけるものの一つに漆工芸がある。ウルシの木から採取した樹液は、複雑な工程と高度な技術によって、美しくあでやかな漆器という芸術品に変わる。日本人の暮らしに密着し、精神風土をも映し出したきた漆は、はるかいにしへの縄文時代にはすでにその基本技術が確立され、約三千年前の縄文時代晩期の是川遺跡（これかわ）においては縄文漆文化の爛熟期を迎えたとされる。

青森県八戸市にある是川遺跡は、市の中心部から四キロほど離れた新井田川沿いの台地に広がる遺跡であり、籃胎漆器（たなご）、装身具、飾り太刀など漆を使用した出土品、漆液を保管した土器や

（漆の道） ジャパンロード

中村 覺

● 光星学院理事長

漆液をこした布といった漆工作業にかかわる遺物も出土している。近年では、赤色漆塗り櫛やふたつきの樹皮製容器という重要文化財級のものも見つかっている。

平成十六年四月、八戸市においては是川遺跡ジャパンロード（漆の道）プロジェクトが立ち上がり、調査実行委員会会長を仰せつかった。このプロジェクトは、精巧な漆遺物が多数出土している是川遺跡の漆文化を手がかりに、中国をはじめとするアジア地域や国内の漆文化の調査・研究などを通して、漆文化の起源や広がり、縄文文化の実相を探っていくというものであった。

連綿と続く漆文化だが、その起源には依然として多くの謎が残されている。現段階で世界最古の漆器は日本から見つかっている。北海道函館市の遺跡から出土した約九千年前の漆遺物がそれであり、中国で最古となっている浙江省の遺跡から出土した約七千年前の漆遺物より二千年も古い。従来、日本の漆文化は中国大陸から伝わったとされてきた。だが現在では、中国起源説、日本独自発生説、多元発生説など多くの見方が出ている。体系的に未解明のアジア漆文化について、プロジェクトは空白の地図を一つずつ埋めていく努力をした。

このプロジェクトの事業は、中国、韓国、ベトナムなどの海外調査をはじめ、国内調査や取材活動、海外フォーラム・研究発表会、調査報告としてのシンポジウムや写真パネル展を実施し、集大成としてアジアシンポジウムを開催して情報発信をした。三年間に漆のルーツを求める旅としてジャパノードツアーを三度実施し、これに参加させていただいた。

ジャパンロードツアーの一度目は、平成十六年十月九日～十四日の「中国長江下流域」訪問であった。七千年前の遺跡の復元現場である河姆渡遺跡と出土品を展示している同遺跡博物館、アジアの漆研究のシンボルである六千四百年前の「赤漆塗りの木椀」が保存されている浙江省博物館などを見学し、多彩な漆遺物がある良渚文化博物館では、精巧な玉器に強烈な印象を受けた。二度目は、平成十七年六月二十四日～二十九日の「ベトナム」で、ベトナ

ム最古の二千四百年前の漆遺物が出土しているベトヘー遺跡や、中世の赤漆の仏像群、現代に息づく芸術性の香り高い漆画をベトナム国立美術館で目の当たりにし、ベトナムの多彩な漆文化と独自の発展のありようを見て、新鮮な驚きを覚えた。

三度目の平成十八年十月二十六日～三十一日の「中国長江中流域」では、馬王堆漢墓から出土した漆塗りの大きな棺をはじめ、湖北省博物館では特別公開の漆遺物や古代の音楽会を再現したステージ上の編鐘の漆塗りの梁など、各地の漆文化とその歴史に触れることができた。

このプロジェクトは試行錯誤を繰り返しつつも、当初予想していた以上の成果を上げることができたと思う。何より、このプロジェクトが縁となって、国内外の研究者たちが漆文化の起源や変遷について大いなる関心をもち、プロジェクトの枠を超えて調査研究を進

めてくれたことが大きな後押しになり、漆研究のための大きな礎を築くことができたのではないかと思っている。

貴重なプロジェクトに参加し、研究団の方々の努力と手助けにより、太古の歴史に臨むという壮大な夢をかなえていただいた感動は至宝である。縄文時代という古代から連綿と続く文化をもつ地元八戸を誇りに思う。



●夏目漱石のロンドン時代と現代

漱石は、百年余り前にこう書いた。

「倫敦に住み暮らしたる二年は、尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり」と。

一九九四年四月、私はロンドンにいた。フランスとイギリスでノルマンデー

イー大作戦五十周年記念式典が米・仏・英の首脳と、ベテランの兵士が大勢参加してにぎにぎしく行われた。ウエストアクトンの朝は、日本人サラリーマンが次々と出勤する。日本人学校の生徒が足早に登校していく。テレビコマシヤルには毎日、日本の企業名が流れる。M25環状線には、同様の看板が目飛び込んでくる。ロンドンの銀座リージェントストリートには日本の百貨店があり、その一階にはすし屋があ

イギリスの
日本文化研究

齊藤 末弘

●西南学院理事長

って、ときおり演歌が聞こえた。私は毎朝、駅前のインド人の雑貨屋に「タイムズ」を買いに行つたが、日本企業の広告は見ても、日本文化に関する記事は見たことがなかった。首相が三人交代したときだけ小さく載つた。

●イギリスの日本文化研究

私は、ロンドン大学J・R・C（日本研究センター）から招かれて、一年間留学した。職員はわずか一人。所長はアメリカ人のドルウ・ガースル教授（近松文学）だった。毎週水曜日、五時間目に日本に関する研究発表が行われた。あるときは「吉田学校について」、またあるときは「芭蕉」、またあるときは「津島佑子の作品」と、多岐にわたつた。その成果が機関紙「ジャパン・

フォーラム』（創刊一九八九年四月）に発表されているのである。一九九四年まで六年間十二冊の内容は総数百十一編、その内訳は政治十八、経済二十七、歴史三十一、文化三十五（うち文学八）、である。

ちなみに、イギリスのおよそ百くらいある大学のうち二十五大学に日本に関する（語学を含む）学科やコースが存在する。その教員数は、イギリス全土で百九十一人。そのうち文学十一人、政治・経済九十九人、日本語八十一人（非常勤を含む）であつた。有名なケンブリッジ八人、オックスフォード十三人、シェフィールド二十三人、カーディフ九人、マンチェスター七人等が力を入れている。しかし、「日本研究

センター」をもつ大学は、オックスフォード、ロンドン、マンチェスター大学等であったが、これらは笹川財団、日産自動車等の日系企業が支援しているばかりであった。卒業生は三百人を超える勢いであった。

●第七回日本学欧州会議

八月二十二日から二十六日まで、私は誘われてコペンハーゲン大学で開催された「日本学欧州会議」に出席した。三十一カ国から四百人余の「日本」を日夜研究している学者が集まった。それだけで、滑稽にも私は感動した。出席者の多い順に国名を挙げれば、まずドイツが七十九人、日本七十一人、イギリス四十八人、デンマーク三十六人であった。国際会議は八分科会に分かれ、百七十八人の発表があった。

特徴の一つ目は、「天皇」論が自由活発に行われたことであった。二つ目は、フェミニズムの流れから「労働と性」「性と贈答品」等の探究が目立つたことである。三つ目は、単なるオリエンタリズムを超えて、文化論においても、グローバルな国際性に連なる研究が活発になったことであった。つまり比較文化論の、例えば「日本文学に関するロシア人最初の評論」（モスクワ大学）、「サイデンスデッカーの『源氏物語』論批判」（同）、「新古今和歌集・相聞歌のある記号論的分析」（プラハ大学）、あるいは「日本文化、心理構成要素としての『怪談』（モスクワ大学）等、忘れがたいものであった。ここで私は多くの友人を得たのである。

●大江健三郎のノーベル文学賞受賞

十月十四日、「タイムズ」紙は「サムライ作家に敬服」という見出しで、大江健三郎のノーベル文学賞受賞について、写真つき囲み記事を出した。「日本と言え、いまや経済やハイテクを想起するが、この機会に日本文化を見直さなければならぬ」といった論旨であった。しかし、他紙には出なかった。

また、名門オックスフォード大学に、有史以来初めて日本人の専任講師が採

用された。彼女は神戸外国語大学の出身で、ご主人はロンドン大学の教授であった。

このようなうれしいニュースの一方で、翌年一月、阪神淡路大震災が伝えられ、また、地下鉄サリン事件が大きく報道されて、ロンドン地下鉄の厳しい警備にまで及んだ。

日本文化研究は、漱石の時代とは隔世の感があるが、大学の図書館は、予想以上に蔵書が貧しい。経済優先を脱皮して、本当に交流し、「文化」を理解し合うようになるには、政財界が一致協力して促進するよりほかはないのかもしれない。

